


# 1 作 物

項 目	作 業 内 容
<p>(1)普通期水稻の育苗管理</p> <p>(2)早期栽培水稻の田植え前後の管理</p>	<p>5月は普通期水稻の育苗が始まる。四国地方の1ヶ月予報では、5月からは気温は高くなるとの予報であり、出芽温度が高すぎると籾枯細菌病などの病害が発生する可能性があるため、外気温の変化に注意しながら出芽室内の気温が30℃を上回らないようにする。</p> <p>シルバーポリトウの育苗では気温が高すぎて苗が徒長する事があるので、トンネル内の温度管理に注意するとともに、灌水をやや控えて徒長を防ぐ。山間・中山間地では気温の較差が大きいので朝晩は保温に努める。</p> <p>ア 施肥 コシヒカリの基肥は10a当たり成分量で窒素が3kg、りん酸、加里はそれぞれ6kgが基準であるが、早期栽培では近年、登熟期が異常高温で推移することが多いので、高温による登熟阻害を軽減するために、事前にけい酸質資材を投入するとともに、基肥の窒素を1～2割控え、りん酸をやや多めに施す。</p> <p>イ 病害虫防除 コシヒカリはいもち病に弱いため、植付け前にいもち病等が同時防除できる育苗箱施用剤を処理してから田植えする。 田植え後の置き苗はいもち病の発生源になるので、なるべく早く処分する。</p> <p>ウ 栽植密度 水稻の過繁茂を防止して品質低下を防ぐことと、使用苗箱数を減らして(従来の坪60～70株植えに対し5～6枚削減可能)コスト低減を図ることを目的に、水稻の疎植栽培を推進しており、県内で実施した展示圃でも、ほとんどの事例でその優位性が証明されている。 この栽培では、1株植付け本数を3～4本の小株で、坪当たり45～50株(現在普及している田植機で最も広い株間)に植え付け、無駄な分げつを防ぎ、イネの持つ潜在能力を十分発揮させて、秋まさり型の生育になるのが特徴で、栽培管理はほぼ慣行に準じて良い。</p> <p>エ 除草剤 除草剤の使用に当たっては、処理量と時期を守るとともに、処理後7日は完全に止水し、水尻や畦畔から薬剤を含む水が出ないようにする。また、除草効果を高めるため、少なくとも5日間は水深3～5cmの湛水状態を保ち、その間田面を露出させたり落水やかけ流しをしないようにする。また、ジャンボ剤やフロアブル剤を使用する場合は拡散性を高めるためやや深めに湛水するとともに、藻類が発生(圃場の2割以上)している場合は拡散性が悪く除草効果が劣るので、粒剤に変更する。 写真1 水田に繁茂したイヌホタルイ</p> 

項 目	作 業 内 容
<p>(3) 麦の収穫</p>	<p>近年、ノビエを対象に田植後15～20日頃まで使用できる除草剤が登録されているが、この時期に使用してイヌホタルイが多量に残っている圃場が多く見られる。イヌホタルイは1葉期を超えるとほとんどの除草剤で効果が低いので、薬剤の使用時期範囲内で早めに処理する。また、イヌホタルイ多発生田では、この草種に効果が高い成分(プロモブチド、ベンゾビシクロン、クロメプロップ)を含む剤を用いる。</p> <p>ア 赤かび病罹病粒、カラスノエンドウ、異物の混入防止の徹底  今年、麦の出穂期以降に雨が多く、赤かび病に罹病した麦が混入する可能性もあり、そうすると収穫～乾燥までの段階でも感染が拡大して全体の麦に被害を与える。また、麦畑の雑草であるカラスノエンドウの種子や金属、ガラス、石等の異物が収穫時に麦に混入すると、調製や精麦及び加工段階での除去が困難である。  どちらも産地の評価を著しく低下させるので、収穫前及び搬入時の調査等で徹底した混入防止対策に努める必要がある。</p> <p>(ア) 立ち毛調査  ・生産者による互評会や圃場巡回等を行い、赤かび病発生圃場やカラスノエンドウ多発圃場の麦を混入させないような措置をとる。  ・カラスノエンドウは収穫までに地域ぐるみの除去を行う。その際圃場内だけでなく、畦畔や農道周辺等のカラスノエンドウの除去も行う。</p> <p>(イ) カラスノエンドウの収穫直前抜き取り  ・収穫前に圃場内を巡回し、カラスノエンドウを抜き取る。  ・収穫時に発見した場合は、必ず抜き取ってから収穫を再開する。</p> <p>(ウ) 空き缶、ビン等の回収  ・圃場に捨てられた空き缶やビン等が異物の混入原因にあるので、収穫前に回収する。  ・コンバイン収穫時には、空き缶やビン及び圃場の土を刈り込まないように注意して収穫作業を行う。</p> <p>(エ) 共乾施設での混入防止  ・カントリーエレベーター等の大型共同乾燥施設では、全体の品質低下を防ぐため立ち毛調査や受け入れ時の水分、品質のチェック特に赤かび病の調査を入念に行う。  ・赤かび病発生麦やカラスノエンドウ種子の混入麦は荷受けしない。</p> <p>イ 麦の適期収穫  今年の麦は、播種時期によってばらつきがあるものの、出穂期は平年よりやや早い～平年並であった。しかし、出穂後に気温が低い日が続いたため収穫適期はやや遅れると見られる。</p> <div data-bbox="1059 1671 1442 1955" data-label="Image"> </div> <p>写真1 収穫期を迎えたマンネンボシ</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>5月は気温は高く、降水量は平年並との予報であり、麦の収穫時期は周期的に天気が変わって収穫に支障が出るのが懸念される。さらに麦は収穫適期幅が短いうえに降雨による品質低下が著しいので、圃場観察による収穫適期の予測と、天気予報を見ながらの適切かつ迅速な収穫作業が必要になる。</p> <p>(ア)収穫適期      麦の成熟期は、出穂期（圃場全体の穂数の40～50%が出穂した日）後の日数（平年値）でみると、農林水産研究所等のデータで、ヒノデハダカは43日、マンネンボシ、イチバンボシは45～48日、小麦のチクゴイズミは約50日あるが、今年はこれより長くなると予想される。</p> <p>コンバイン収穫の場合は、成熟期からさらに2～4日後、穀粒水分が30%以下になった時期である。</p> <p>穀粒水分は、晴天の場合で3～4%、曇天の場合で1～2%減少するので、刈取り時期を予測して適期刈りする。収穫が早すぎると退色粒などの発生で品質の劣化が大きいため、今年は特に早刈りにならないようにする。また、今年は成熟期も圃場間差が大きいため、入念な圃場観察によって成熟期を判断することが重要である。</p> <p>(イ)高水分収穫での注意事項      麦の収穫で、品質低下を防ぐために最も大切なことは、高水分刈りを避けることであり、早刈りや降雨直後の収穫は厳禁である。しかし、収穫適期の降雨等で、やむを得ず穀粒水分30%以上の高水分で収穫しなければならない場合も予想される。このような場合のコンバイン収穫では、こぎ胴の周速度を通常より10～20%下げて、退色等の被害粒が発生しないようにする。</p> <p>また、収穫後に長時間（水分40%で6時間以上）放置すると穀粒の変質を来し品質が低下したり、赤かび病が感染拡大することがあるので、収穫後は直ちに乾燥を行う。</p> <p>ウ 麦の乾燥・調製      麦の乾燥で特に留意すべきことは高水分時の乾燥である。穀粒水分が25%以下では45～50 で乾燥できるが、25%以上の場合は品質低下（退色粒の発生等）を防ぐため穀温を下げて40 以下で乾燥する。乾燥速度は乾減率0.8%で、裸麦では13%以下を目安に乾燥する。</p> <p>調製に当たっては、実需者から望まれている高品質麦を供給するという点を最優先し、雑草種子や異物及び病害被害粒等の除去、荷口ごとの品質の均一化及び細粒の混入防止を図るため、グレイダーを用いて特に入念に調製する。なお、グレイダーの篩目はヒノデハダカでは2mm、マンネンボシ、イチバンボシでは2.2mm、小麦のチクゴイズミは2.3mmを基準とする。</p>

